



愛隣幼稚園.....

園だより

.....15. 2月号

子どもが遊ぶということは

1年で1番寒い時期を過ごしている子どもたちです。もし、毎日をお家で過ごしていたら、子どもたちは暖かい部屋に閉じこもっているのかもしれませんが(大人がこんな時にはあまり外には出たかないものですから・・・)。幼稚園で過ごす子どもたちの毎日は、夏も冬もあまり変わらず、晴れてさえいれば園庭には賑やかな声がいっぱいです。(好きなあそびの種類によって、子どもたちの居場所は内と外に分かれ、勿論、お部屋が定位置という子どもたちもいます。)まさか!の川づくり(水あそび)。いつも通り裸足で走り回る女の子たち。大人が見たら思わずブルブルとしてしまいそうな光景ですが、子どもたちには関係ないようで、どの顔も実に満足げです。夢中になっています。愛隣幼稚園の生活にはそんな「あそび」がいっぱいです。子どもたちが考え、子どもたちが作り、楽しんで満足する「あそび」です。

今さらですが、私たちはこの「あそび」が子どもたちの生活に最も大切なものと考えて保育をしています。「あそび」の中にこそ、子どもたちの学びがあり、身体の成長があり、心の成長があり、子ども自身の充実があるからです。たんぼぼのY君が、庭にできた2つの水たまりを見つけて、それを繋げて水を流そうとしています。Y「川だよ。」私「ほんとだ!」Y「流れないね〜」私「う〜ん、流れないね。」最後まで彼と一緒に居られなかったのですが、どうやったら水は流れるんだろう?という小さな探求がそこでは始まっていました。また、ある日。ばらのS君がたんぼぼのS君を、ポーターと三輪車を連結させ乗り物に見立てたものに乗せてあげて、実に楽しそうに遊んでいるのに出会いました。「えっ!」私はびっくりしてしまいました。ついこの間まで、ばらのS君は彼を慕ってやってくるたんぼぼのS君をどうしたらやり過ごせるかと、それはもう必死だったのです。その姿を知っていましたから、本当にびっくりして、そして嬉しくなっていました。ゆめ組のあそびは、仲間の知恵と力が合わさって大きく深く広がっていきます。そのおもしろさは学年を超えて幼稚園中のみんなでも楽しむものになっていきます。登園から降園まで、子どもたちの生活全てが「あそび」でいっぱいになります。家に帰ってもその「あそび」のことを考え、翌日のために準備して持ち込む子どもも稀ではありません。それほどまでに没頭し夢中になった子どもたちの満足、心の充足感はいかばかりでしょう。不思議なことですが、そのことは最後のホールの片付けにも現れるのです。指示を待つことなく自分たちで考え、協力しどの子もすすんで力を発揮して片付ける姿は、すでに自立したひとりの人です。子ども主体の自由な「あそび」が、ここまで子どもたちを大きくする、その手応えを実感する2月です。

お茶の水女子大附属幼稚園の主事を長年務め、日本の幼児教育の発展に尽くした倉橋惣三が次のように言っています。

「子どもにとって遊びほど幸せで貴いものはない。子どもの遊びはつまり子どもの身体と心との旺んな活動が外に現れたのに外ならないのであって、子どもが遊ぶということは大袈裟に言えば、つまり子どもが生きているということと同じ意味であるといってもいいのです。」更に「その遊びの中で自然に子どもが身体と心を活動させているところから起る利益というものは、実に非常なものであるのです。」(倉橋惣三『幼稚園雑草』)

夢中になって遊ぶ子どもたちの姿は私の目に、しばしば神々しく映ります。生きているということの貴さに気付かせてもらうのです。共に暮らす仲間ていさせてもらえる私たちの幸せです。